

モーセ②

□モーセの信仰の手本

信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。(ヘブル 11:27)

□これまでの振り返り

1. アブラハム契約・・・神は、全人類の中から一人の人、アブラハムを召し出し、彼に3つの約束を与えた。土地の約束、子孫の約束、祝福の約束である。神はその約束を確かなものとして、アブラハムと契約を結ばれた。3つの約束のうち、土地と子孫の約束はイスラエル民族だけに対するものであるが、これらを通してアブラハムは復活信仰に導かれた。
2. 3つ目の祝福の約束は、イスラエル民族だけでなく、全人類に関係する。「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」。その祝福とは、アブラハムが信じた復活である。アブラハムの信仰にならば、神には死者を生かす力があると信じるなら、全人類、だれであっても神から復活の祝福を受け取ることができる。
3. アブラハム契約が必ず成ると信じる信仰は、復活を信じる信仰でもある。この信仰が、アブラハムからイサク、そしてヤコブ、さらにヨセフへと継承された。
4. エジプト寄留・・・ヤコブは、ヨセフの功労によりエジプト王から国賓の待遇を受けて、家族とともに飢饉を避けてエジプトに寄留することになった。神はヤコブに、恐れずエジプトへ行くように命じた。なぜなら、かつて神はアブラハムに、【子孫たちが他国で寄留者となり、400年間、奴隷となる】(創 15:13)と預言していたからである。実際、寄留開始から30年でヤコブの子たちは移動の自由を失い、それから40年後にヨセフは死んだ。
5. モーセの両親・・・ヨセフが死んでから280年後、モーセが生まれた。モーセの父はアムラム、母はヨケベデ(出 6:20)、彼らはエジプト王によるイスラエル民族迫害の中で、命の危険を冒してモーセを隠した。アブラハム契約の約束に基づき、神が必ずエジプトから救い出してくださいと信じ、生まれた子どもに神の使命があることを啓示されたからであった。彼らは信仰によって、エジプト王を恐れぬ勇氣を得たのであった。ここでの、信仰の手本の特徴は、信仰による勇氣と決断である。
6. モーセ・・・今回はモーセが生まれてから40歳まで、「個人的な信仰」の手本を見た。モーセもまたアブラハム契約を信じる信仰によって、勇氣と決断を發揮した。彼は「ファラオの娘の息子」と呼ばれるより、神の民であるイスラエルと苦しみを共にすることを選んだ。今回から「神の使命を行う者としての信仰」を見よう。その第一は、忍び通す信仰である。

□モーセ② 神の使命を行う者としての信仰 その一 忍び通す信仰

1. モーセの人生 40歳から80歳まで（出2：11～25）

- (1) 2：11～12 こうして日がたち、モーセは大人になった。彼は同胞たちのところへ出て行き、その苦役を見た。そして、自分の同胞であるヘブル人の一人を、一人のエジプト人が打っているのを見た。彼はあたりを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に埋めた。
- (2) 2：13～14 次の日、また外に出てみると、見よ、二人のヘブル人が争っていた。モーセは悪いほうに「どうして自分の仲間を打つのか」と言った。彼は言った。「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。おまえは、あのエジプト人を殺したように、私も殺そうというのか。」そこで、**モーセは恐れて**、きっとあのことが知られたのだと思った。
 - 「モーセは恐れて」・・・エジプト人を殺したことがファラオに知られ、裏切り者として処刑されることを恐れたのか？ 後述3.にて
- (3) 2：15 ファラオはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜した。しかし、モーセはファラオのところから逃れ、ミディアンの地に着き、井戸のかたわらに座った。
- (4) 2：16～19 さて、ミディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちは父の羊の群れに水を飲ませに来ていて、水を汲み、水ぶねに満たしていた。そのとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。するとモーセは立ち上がって、娘たちを助けてやり、羊の群れに水を飲ませた。彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうして今日はこんなに早く帰って来たのか。」娘たちは答えた。「一人のエジプト人が、私たちを羊飼いたちの手から助けてくれました。そのうえ、その人は私たちのために水汲みまでして、羊の群れに飲ませてくれました。」
- (5) 2：20～22 父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうして、その人を置いてきてしまったのか。食事を差し上げたいので、その人を呼んで来なさい。」**モーセは心を決めて、この人のところに住むことにした**。そこで、その人は娘のツィボラをモーセに与えた。彼女は男の子を産んだ。モーセはその子をゲルシヨム（寄留者という意味）と名づけた。「私は異国にいる寄留者だ」と言ったからである。
- (6) 2：23～25 それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らを見こころに留められた。

2. モーセの人生 40歳から80歳まで（使7：23～29、初代教会執事ステパノの弁明）
- (1) 7：23～25 モーセが40歳になったとき、自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こりました。そして、同胞の一人が虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち殺して、ひどい目にあっていた人のために仕返しをしました。モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。
- (2) 7：26～29 翌日、モーセは同胞たちが争っているところに現れ、和解させようとして言いました。「あなたがたは兄弟だ。どうして互いに傷つけ合うのか。」すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけながら言いました。「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。昨日エジプト人を殺したように、私も殺すつもりか。」このことばを聞いたモーセは逃げて、ミディアンの地で寄留者となり、そこで男の子を二人もうけました。
3. モーセが恐れたのは、イスラエルの民に拒絶されたこと
- (1) ヘブル 11：27 モーセは、王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。 目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。
- (2) ヘブル人への手紙は、モーセがエジプト王の憤りを恐れなかったと記す。モーセが恐れたのは、イスラエルの民に拒絶されたこと、そして自分がしたことは神の時ではなく、神の方法でなかったことを悟ったからである。
- (3) 出2：14～15 をできる限り原文の語順のとおりに訳すと、次のとおり。
- ① 彼は言った。「だれが、おまえを俺たちのつかさやさばきつかさにしたのか？ 俺も殺そうと言うのか、あのエジプト人を殺したように！」
- ② 恐れた、モーセは
- ③ 言った、「きっと知られた、あのことが」
- ④ 聞いた、ファラオは、このことを
- ⑤ 探した、殺そうと、モーセを
- ⑥ 逃げた、モーセは、ファラオの前から
- ⑦ 住んだ、地に、ミディアンの
4. 「目に見えない方を見ているようにして、忍び通す」・・・カルテレオウ「強くある、断固とした態度をとる、忠実である、耐える」。神の時と神の方法を待ち、「断固として立つ」。神の働きに用いられるのは、その次である。

□出 2：21 「モーセは心を決めて」、ミディアンの地で寄留者となった。モーセはどのような望みをもって決心したのか（彼が恐れたこと、彼が忍び通したことと関係する）